



# Value Creation

創価大学 SDGs レポート 2020

## <メッセージ>

### 創価大学副学長/SDGs 推進センター長 田中亮平

創価大学 SDGs 推進センター（以下、センター。）が2019年4月に発足してからおよそ2年になります。2年目の今年はコロナ禍に見舞われるなかではあったが、いくつかの新しい取り組みを進めることができました。

一つは新たな中期計画「Soka University Grand Design 2021-2030」において、教育、研究、ダイバーシティと並んでSDGsが計画の4つの柱の一つとなったことです。そこでは全学的なSDGs推進、SDGsに関わる専門家の育成、SDGsに関連する先進的研究の補助などをうたっています。また国連諸機関との連携、ユネスコスクール支援など社会や地域と連携したSDGs活動、さらにはサステイナブルキャンパスに向けた取り組みなどが計画されています。これらの計画については各年度の目標を明確にして着実に実行します。



次に地球的課題についての啓発活動にも力を入れました。気候変動対策については、2021年4月2日に「気候非常事態宣言」を発出する運びとなりました。国内の大学としては全国で3例目です。また、2020年7月にはキャンパス再エネ100%を達成した千葉商科大学とのオンライン意見交換会を開催し、その創意あふれる先進的取り組みに大きな刺激を受けました。新年度には2050年再生可能エネルギー100%達成を目指したエネルギー計画の検討を始めます。また4Rやエシカル消費などカーボンニュートラルに向けた取り組みを推進し、「創価大学サステイナブルマネジメント宣言」の発出を目指します。

次に地球的課題についての啓発活動にも力を入れました。気候変動対策については、2021年4月2日に「気候非常事態宣言」を発出する運びとなりました。国内の大学としては全国で3例目です。また、2020年7月にはキャンパス再エネ100%を達成した千葉商科大学とのオンライン意見交換会を開催し、その創意あふれる先進的取り組みに大きな刺激を受けました。新年度には2050年再生可能エネルギー100%達成を目指したエネルギー計画の検討を始めます。また4Rやエシカル消費などカーボンニュートラルに向けた取り組みを推進し、「創価大学サステイナブルマネジメント宣言」の発出を目指します。

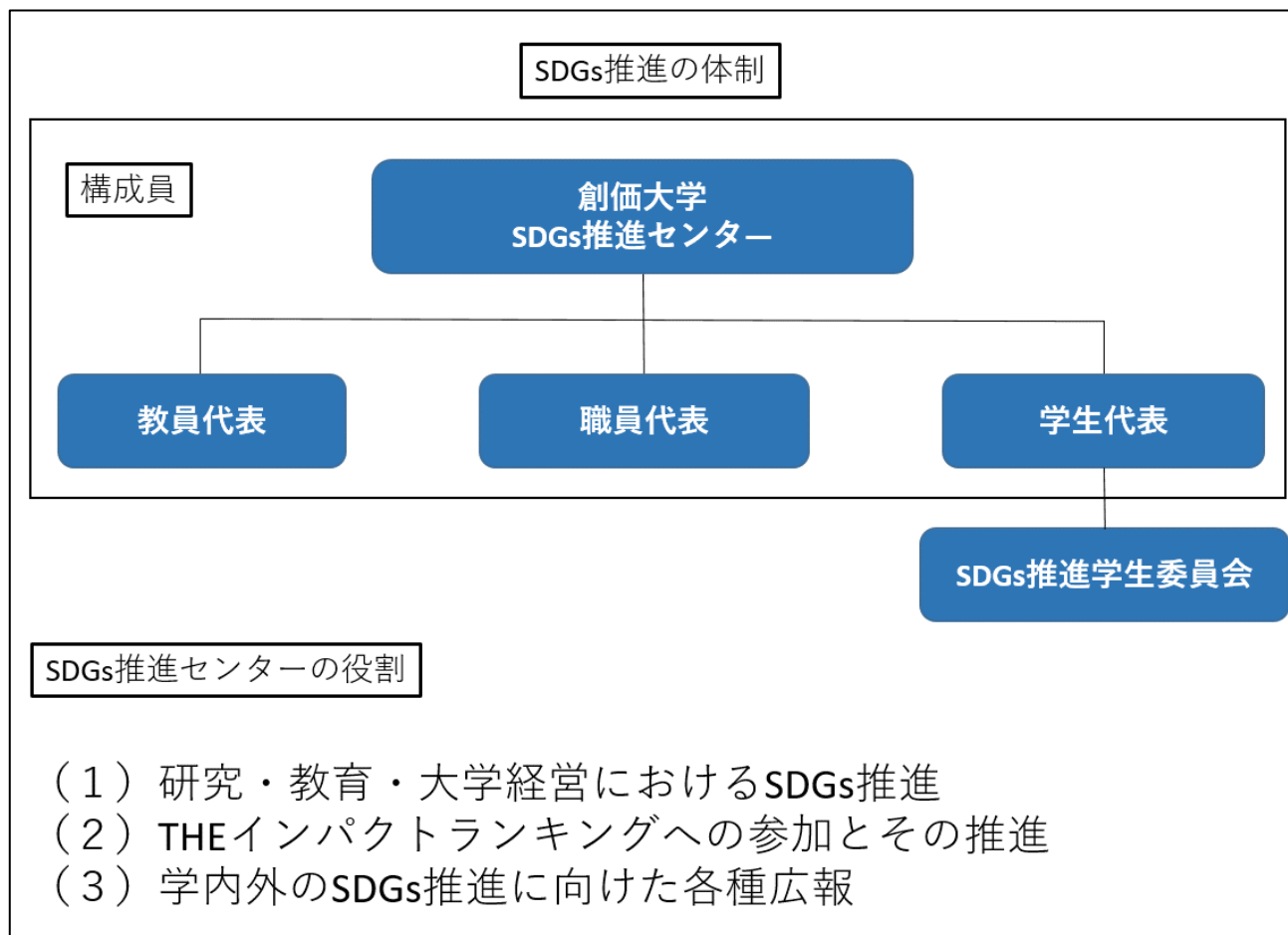
さらにはSDGsに関する他大学・諸機関との連携・協力を進めることができました。国連大学サステナビリティ高等研究所のSDG大学連携プラットフォームに参画し、加盟大学との情報交換の機会を得るとともに本学の取り組みを紹介する機会にも恵まれました。また本学創立50周年を記念する連続イベント「価値創造×SDGs」を「平和・公正」をテーマに昨年秋にオンライン開催しましたが、国内外の大学や国際機関から多彩な登壇者を迎えて、有意義で感銘深いものとなりました。

最後にキャンパスにおける身近なSDGsの推進について触れます。センター委員には学生代表も加わっていますが、委員会ではつとめて学生によるプロジェクト提案を発表してもらっています。その一つに脱ペットボトルを目指したマイボトル推進プロジェクトがありました。環境負荷が高いペットボトル使用量を削減するために学内各所の給水器を有効活用するもので、試験利用を経て導入することが決まりました。また学生団体のAspire Sokaは上述の「価値創造×SDGs」イベント開催に合わせて啓発を目的とした展示を実物とオンラインで作成してくれました。

新年度もコロナ禍の影響は続く見込みですが、その中でもSDGsに残された時間は減り続けます。いかなる状況にあっても持続可能な未来に向けてできる限りの挑戦を続けていきます。

## <創価大学 SDGs 推進センターの体制と役割>

創価大学 SDGs 推進センターは、教職員の代表と共に、学生の代表が加わり、学内外の SDGs を推進することを目的に、関連部署と連携しながら、取り組んでいます。2020 年度には、学生代表のもとに「SDGs 推進学生委員会」が発足し、学生間の交流や大学内の SDGs 推進に向けた取り組みを検討しています。



2020 年度は、当センターとして、新グランドデザインに向けたプロジェクトの準備、脱プラスチックに向けた「オンライン SDGs セミナー」の開催、ウォーターサーバーの導入や再生可能エネルギーの利用など学生より提案のあった内容について検討を行いました。

本学は、2019 年より開始となった THE インパクトランキングにおいて、2019 年 4 月に発表された「THE University Impact Ranking 2019」において、本学は世界 101-200 位、国内 4 位と高い評価を得ました。2020 年 4 月の「THE University Impact Ranking 2020」では、SDGs への社会的関心が高まり、同ランキングへの参加校が増加したこと、また、評価項目が増えたことにより、本学のランキングは、世界 401-600 位という結果になりました。また、「THE University Impact Ranking 2019」の振り返りを行い、「SDG4：質の高い教育をみんなに」への貢献をはかるための指標の一つ、「ファースト・ジェネレーション」（両親、兄弟の家族のうち、初めて高等教育機関に入学）について、2020 年度より新入生アンケートにて調査を開始しました。



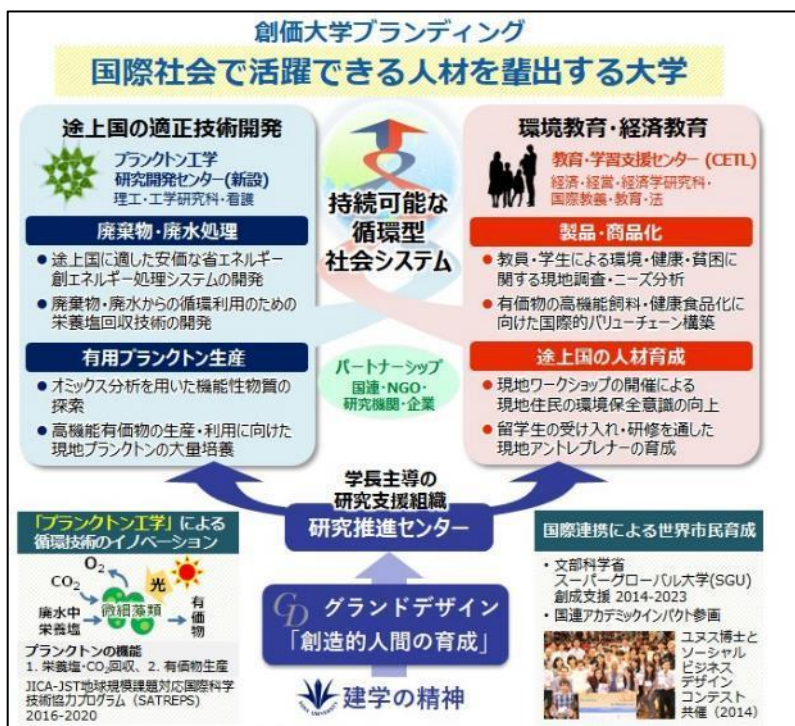
## <環境への取り組み>

### ■途上国の適正技術開発と環境教育・経済教育を進める「PLANE3T Project」



私立大学研究ブランディング事業「PLANE3T Project」(※)では、持続可能な循環型社会システムの構築を目的に、特色ある学際的研究分野「プランクトン工学」を提案。エチオピア・タナ湖を中心に、生態系や漁業に被害を与える水草「ホテイアオイ」のバイオマス・製品化に力を入れています。本研究では、低コスト省エネルギーという観点で開発途上国での普及が期待されるメタン発酵技術を活用。布袋菜からエネルギーとなるメタンガスと、窒素やリンなどの栄養分を抽出します。その後、抽出した栄養分を、たんぱく質・ビタミンに富んだ藻類「スピルリナ」の培養に活用。培養したスピルリナを用いた製品を開発することで、たんぱく質不足による栄養失調の解決に取り組んでいます。

※PLANKton Eco-engineering for Environmental and Economic Transformation



### ■創価大学理工学部を中心とする研究が「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS)」に採択



本学が推進するアフリカ諸国との国際共同研究の一環が科学技術振興機構 (JST) および国際協力機構 (JICA) による地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) に採択されました (代表: 理工学部 佐藤伸二郎教授)。研究開発課題は「ナイルの源流エチオピア・タナ湖で過剰繁茂する水草バイオマスの管理手法と有効利用プロセスの確立」と題し、研究期間は今年度の準備期間を含め2021年度~2025年度までの5年間です。

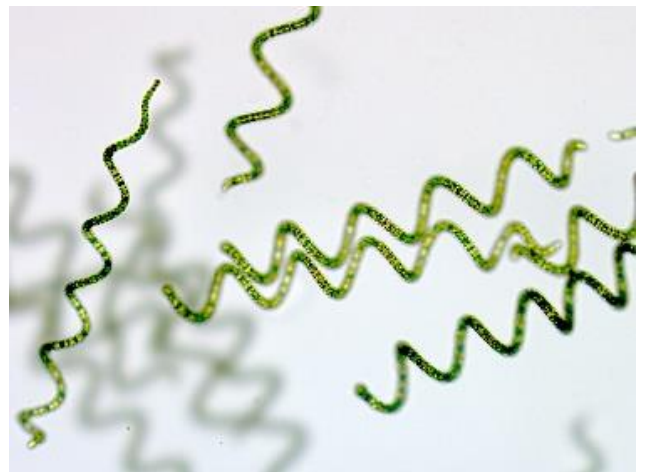


タナ湖の水平線の彼方まで広がるホテイアオイ

本学では前述の国際共同研究事業「PLANE3T」を、大学を挙げて推進してきました。エチオピア・バハルダール大学でのスピルリナ培養ポンド建設や国際環境教育シンポジウムの共催などの多くの成

果を成し遂げたことが、今回の SATREPS 事業の採択に貢献しました。今回の採択は SATREPS-COSMOS（代表：理工学部 戸田龍樹教授）に次ぐ、2つ目の SATREPS 事業となります。これまで私立大学では一つの学部で2つの SATREPS 事業に採択された例はなく、本学ならびに理工学部の国際活動に大きな期待が寄せられています。

本プロジェクトの対象国であるエチオピア最大のタナ湖では、船を出せないほど密集して湖面を覆う外来植物ホテイアオイが東京23区の面積に匹敵するほど過剰に繁茂し、様々な環境・経済問題を引き起こしています。ナイル川の源流でもある広大なタナ湖は、本来自然環境豊かな風光明媚な場所と知られています。本プロジェクトでは、これらの問題を解決するために、健全な湖沼生態系への修復に取り組み、ホテイアオイの刈り取り手法と収穫されたバイオマスの有効活用を研究開発していくものです。得られたバイオマスは栄養価の高いスーパーフードの「スピルリナ」（写真）や現地農作物を生産するための肥料や土壌改良材に変換され、「見えない飢餓」が蔓延するエチオピアで児童の栄養改善を目指します。



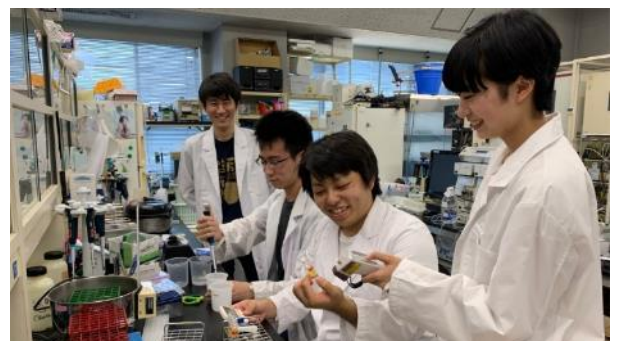
ホテイアオイから抽出した栄養でスピルリナを生産

本 SATREPS の実施チームは創価大学を主幹校として、滋賀県立大学、滋賀県琵琶湖環境科学研究中心、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングの国内4機関と、バハルダール大学、インジバラ大学、タナ湖周辺水域保護開発機構のエチオピア3機関で構成されています。創価大学からは、理工学部共生創造理工学科、情報システム工学科、経済学部、経営学部、教育学部、看護学部、プランクトン工学研究開発センターの教員・大学院生が参加予定です。本プロジェクトのニックネームは「SATREPS-EARTH (Eco-engineering for Agricultural Revitalization Towards Human nutrition)」と呼び、本事業内容は人工衛星やドローンを用いたリモートセンシング技術を利用したホテイアオイ・バイオマスの推定と刈り取り方法の確立など4つの研究テーマに分かれます。

## ■大学コンソーシアム八王子主催令和2年度「学生企画事業補助金」に丸田ゼミの「八王子産酒米粉を利用したプラスチック代替品の開発」が採択



理工学部共生創造理工学科の丸田晋策ゼミの学生は、八王子市の特産品である「高月清流米」を生かした地域創生に取り組んでいます。丸田ゼミは、2016年より、大学コンソーシアム八王子が主催する「学生企画事業補助金」に5年連続で採択され、市内の農家や企業などと連携し、実証実験を行っています。



丸田ゼミの学生たち



現在は、地酒「高尾の天狗」の製造過程で生じる副産物米粉の有効活用の研究を行っています。これまでの研究課程で発見した米粉デンプンの性質と構造の成果を応用して開発した、米粉 100%のチョコブラウニーは八王子市内のパン屋で販売されています。2020年度は、さらに研究を応用してプラスチック代替品・食べられるスプーンとバイオプラスチックの開発に向けたプロジェクトを開始。環境問題や食品ロス課題の解決へ貢献していきます。



食べられるスプーン（試作品）

## ■脱プラスチックを考える「SDGs オンラインセミナー」の開催



創価大学 SDGs 推進センターが主催するオンラインセミナーを、2020年10月16日に開催。「プラスチック問題を考える～プラなし学生生活は、本当に出来るの？～」とのテーマで、学内外より約120名が参加しました。

基調講演には、本学卒業生でもあり、「プラなし博士」こと国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）の中嶋亮太研究員が登壇しました。中嶋研究員は、東京スカイツリーの重さ300個分を超える年間1,925万～2,342万トンものプラスチックごみが海・河川などの水系に流入していることに言及。

「2050年までに海にたまるプラスチックの総量は10億トンになる計算で、海のすべての魚（深海魚を除く）の重さの量を超えてしまいます。また、太陽の熱や紫外線をあびて海に浮遊するプラスチックが砕けてマイクロプラスチックが生まれます。これらをサンゴ、動物プランクトン、魚、貝などが食べ、生物濃縮が起きている」と述べ、問題解決に向けて使い捨てプラスチックの消費を抑えるライフスタイルへの転換を呼びかけました。学生生活でできるマイバッグ、マイボトル利用の他、固形石鹸や粉末の洗濯用洗剤の使用など、液体から固形の製品へ変更することによる使い捨てプラスチックの削減効果などを紹介しました。

続いて、東京都環境局資源循環推進部資源循環調整担当課長の福安俊文氏が、東京都におけるプラスチック資源循環に向けた取り組みを、本学経済学部西浦ゼミのチーム PLASS の学生らが、「脱ペットボトルに向けたマイボトル用ウォータースタンド学内テスト設置」の事例紹介を発表しました。その後、中嶋研究員とチーム PLASS の学生らのトークセッションが行われ、参加者から寄せられた質問にも答え、活発な意見交換が行われました。



中嶋研究員の基調講演



パネルディスカッション

## ■学生提案によるマイボトル用ウォーターサーバーの試験導入



海洋プラスチック問題解決に向け、創価大学から持続可能な社会を築くことを目指し、大学内でペットボトル削減活動を行っている経済学部西浦ゼミ・チーム PLASSの学生提案により、「マイボトル用のウォーターサーバー」が、2020年9月16日より約1カ月間、学内5箇所です試験導入されました。

マイボトルを使用してペットボトルの消費を軽減することは、プラスチックゴミを減らすことに繋がり、国連が掲げるSDGs（持続可能な開発目標）のうち「SDG6 安全な水とトイレを世界中に」「SDG13 気候変動に具体的な対策を」「SDG14 海の豊かさを守ろう」などに寄与します。



中央教育棟1階に設置されたウォーターサーバー

試験導入を経て、2021年4月よりキャンパス内の9箇所（中央教育棟1階・4階、本部棟3階、教育学部棟1階、理工学部棟1階、看護学部棟1階、中央図書館2階、学生ホール2階、創価女子短期大学1階）に設置されることが決定しました。

## ■東京都へCO<sub>2</sub>削減クレジット12,586トンを寄付し感謝状が授与されました



東京都が目指す「ゼロエミッション東京」の実現に協力し、東京都キャップ&トレード制度の対象事業所である学校法人創価大学としてCO<sub>2</sub>削減クレジット12,586トンを寄付しました。これに伴い、2021年1月4日付で小池百合子東京都知事より感謝状が授与されました。

東京都キャップ&トレード制度とは、東京都環境確保条例により、都内の大規模事業者を対象にCO<sub>2</sub>排出総量削減義務を課している制度です。削減義務量以上にCO<sub>2</sub>削減を達成した超過削減量をクレジット化し、事業所間で取引することを認めています。今回の東京都へCO<sub>2</sub>削減クレジットを寄付する取り組みで、参画した学校法人は4法人で、本法人は2番目に多いCO<sub>2</sub>削減クレジットを寄付しました。



東京都より授与された感謝状

本学は、本年創立 50 周年を迎え、発表を予定している新しい中長期計画で、「平和」の実現に貢献する研究を推進するとともに、大学・諸機関および研究者とのネットワークを形成し、SDGs の達成へ先導的役割を担うことを掲げています。また、SDGs を推進するため、温室効果ガス排出量の削減目標の達成等に貢献します。



中央教育棟屋上の太陽光パネル

## ■「エネルギー計画検討部会」の発足



本学は、2021 年度よりスタートする新たなグランドデザインで、「サステイナブルキャンパスに向けた計画の検討」を掲げ、その準備にあたり、教職員の代表で「エネルギー計画検討部会」を 2020 年 9 月に発足しました。脱炭素社会に向けて、本学のエネルギーの長期計画を検討しています。



中央教育棟：太陽光パネル監視システム



## <教育の取り組み>

### ■創価大学ユネスコスクールプロジェクト



創価大学教育学部・教職大学院は2018年7月にASPUivNetに加盟し、ユネスコスクールへの加盟申請支援をおこなっています。2019年度にはユネスコスクール加盟申請校である東京都八王子市・板橋区・北区および埼玉県、群馬県内の小学校6校、中学校1校、高等学校2校、中学・高等学校1校への加盟申請支援を行いました。

#### ①ESD 関連の勉強会を開催

日本ESD学会・手島利夫先生を講師に迎え、2020年6月24日に「ユネスコスクール推進ミニフォーラム」をオンライン開催しました。本学の教職員・学生のほか、近畿圏、九州圏のユネスコスクール関係者や教諭ら約80名が参加しました。

#### ②教職大学院・教育学部合同 ESD フォーラム「質の高い教育をみんなに～ユネスコスクールの取り組み」をオンラインで開催

教職大学院・教育学部合同ESDフォーラムを2020年12月12日に開催しました。立命館大学堀江未来教授が「国際理解・SDGsを取り入れた教育の考え方と実践」の講演を行い、続いて、小学校と高校に分かれて分科会を行い、小学校・高校各2校（計4校）のチャレンジスクールが日頃の取り組みを発表しました。



### ■国際連合食糧農業機関（FAO）、国連開発計画（UNDP）と協定



本学は、2016年2月に、国際連合食糧農業機関（FAO）と交流協定を締結。この協定は、安定した平和とSDGs（持続可能な開発目標）の実現を目指すうえで、重要な要素となる「食料安全保障」に関して、講義や学習資料等を通じて学生に学ぶ機会を提供するものです。2019年度は、「平和学Ⅱ」の授業にて駐日連絡事務所のチャールズ・ポリコ所長が講演しました。



FAO との調印式

国連開発計画（UNDP）とは、2017年8月に包括連携協定を締結しました。包括協定では、出版や情報交換、講師派遣などの交流、UNDPでのインターン機会の提供、共同セミナー等が含まれております。2020年度は、12月に開催した「価値創造×SDGs」Weekにて、近藤哲生駐日代表が登壇しました。



UNDP との調印式

## ■国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）との協定に基づき、「難民高等教育プログラム」を実施中



本学は2016年5月に、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）と「難民高等教育プログラム<sup>1</sup>」の協定書の調印を行いました。

本プログラムは、日本社会で暮らす難民や、日本で生まれ育った第二世代に高等教育の機会を提供しています。本学では、2017年4月から毎年1名を受け入れ、1期生として受け入れたメグミニャンシャンキムさんが、2021年3月、経済学部を卒業しました。メグミさんは、4月から、鉄道業界のサービス関連会社に就職しました。



UNHCR との調印式

### <メグミさんからの声>

私は難民高等教育プログラムの1期生として創価大学に入学しました。この4年間は想像していた以上に、沢山の学びや学部の枠を超えて、同期をはじめ先輩、後輩、留学生、そして教授たちに出会えることができ、全ての『ご縁』に感謝しています。また、家族や友人、大学の教職員方などといった、まわりの方々の支えがあったからこそ、今の私があります。お陰様で、濃厚な4年間という学生生活を何不自由なく、創価大学で送ることができました。本当にありがとうございました。今後、毎年このプログラムで入学する方が、創価大学でしか出来ない沢山の学びと出会い、経験を大切にして、色々なことにチャレンジできますよう応援しています。



今春卒業したメグミさん

<sup>1</sup> 創価大学は、毎年、UNHCRが推薦する候補者を選考し、1名を受け入れ。受け入れの学部は、経済、経済、法、文、教育、理工の各学部のいずれか。入学者は、創価大学より、学修のため奨学金等を受けることができます。本学の他、国内の大学では青山学院大学、関西学院大学、津田塾大学、明治大学等の11大学がUNHCRと協力し、大学教育の機会を提供しています。

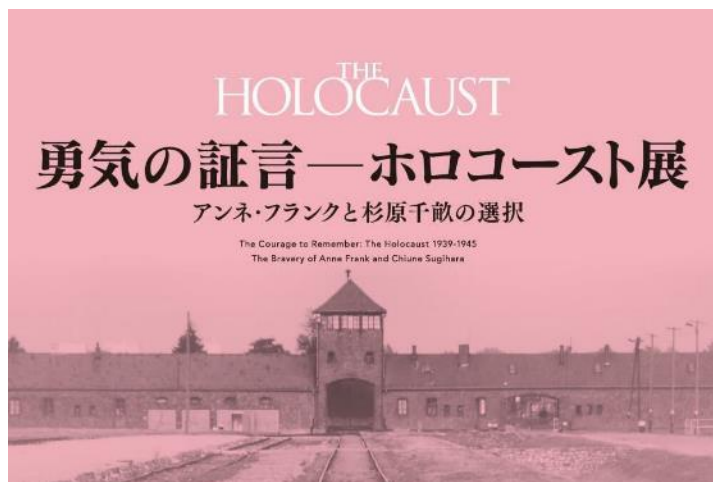


## <平和・人権への取り組み>

### ■「勇気の証言—ホロコースト展 アンネ・フランクと杉原千畝の選択」展の全国巡回



第2次世界大戦終結から70年を迎えた2014年の9月から、「勇気の証言—ホロコースト展 アンネ・フランクと杉原千畝の選択」展（同実行委員会主催、創価大学とサイモン・ウィーゼンタール・センター共催）を東京・池袋、広島、創価大学、苫小牧、福井、青森、沖縄、静岡、福岡、鹿児島、群馬、山形、岐阜、大阪、兵庫、石川、岩手、松本の18会場で開催しました。これまで小中高校生から年配者まで約20万人が来場し、生命の尊厳や平和の大切さ、コミュニティのあり方などについて学ぶ機会を提供し、多くの感想が寄せられました。本展は106枚のパネルと25点の物品類で構成されており、ナチス・ドイツによるホロコースト（大量虐殺）の歴史をたどるとともに、その時代を生き、「アンネの日記」の著者アンネ・フランクと、「命のビザ」で多くのユダヤ人を救った日本人外交官、杉原千畝の人生に光をあてています。



ホロコーストは、人類が20世紀に経験した最も悲惨な歴史の一つです。そして今なお、紛争やテロ、ヘイトスピーチやヘイトクライムなどの暴力や差別が続いています。その意味で、ホロコーストの歴史と、その時代を生き、人びとの真実に迫ることは、私たちが抱える課題に取り組むための手がかりを見出すことに繋がり、本展が平和と人権を考えるための一助となります。本展示は各国大使館、国連広報センター、教育委員会等が後援のもと、開催しています。



#### <寄せられた感想>

- 「戦争はとても残酷なことを改めて感じました。みんな仲良くしたらいいのになと思いました」（10代・女性）
- 「アンネ・フランクの日記、杉原千畝の内容がとても自分の心に響きました。『幸福になることは自分の環境を変えるのではなく自分を変えること』という言葉が深く残っています」（20代・男性）
- 「初めてこのような展示にふれて涙がとまりませんでした。悲しい歴史は二度と繰り返してはならないと決意できる展示でした」（30代・女性）



## ■ASPIRE SOKAにUNHCR WILL2LIVE ムーブメント 2020（第15回UNHCR 難民映画祭）を開催



ASPIRE SOKA は 2016 年 2 月に本学が国連アカデミック・インパクトに加盟し、学生組織として創価大学支部として発足しました。SDGs に関連する問題をはじめとする社会課題について学び、アクションを起こしていく団体です。ASPIRE SOKA では「Global Citizenship Week」という SDGs のアクションを考えるイベントを毎年開催している。2020 年は 7 月 1 日から 7 日間にわたってオンラインで開催し、約 230 名が参加しました。

「UNHCR WILL2LIVE Cinema パートナース」に参加している本学では、「UNHCR WILL2LIVE ムーブメント 2020（第15回UNHCR 難民映画祭）」の開催にあわせて、2020 年 10 月 10 日に「ナディアの誓い」、30 日に映画「ミッドナイト・トラベラー」をオンラインで上映し、学内外よりあわせて約 400 名が参加しました。本映画祭は映画を通して難民への理解を広げることが目的としており、大学をはじめ教育機関とも提携し、啓発活動を展開しています。UNHCR と連携協定を結ぶ本学では、2017 年より学校パートナーズに参加し、開催にあたっては、国連の平和運動を推進する本学学生団体 ASPIRE SOKA との共催で準備にあたりました。



上映前に、映画祭学生責任者の小山朝陽さん（法学部 4 年）の挨拶に続き、角尾十和さん（国際教養学部 4 年）が難民支援協会でのインターンシップの経験等を通し、「難民問題に関心をもつとともに、現状を知ってもらいたい」と語りました。続いて、UNHCR 駐日事務所副代表の川内敏月氏が、難民への支援活動や難民問題の現状と課題などを語りました。

## ■文学部・西川ハンナゼミによる地域プロジェクト



地域のコミュニティが人々の福祉や健康に大きく影響することを授業やゼミ活動で日々学んでいます。日頃、孤独を感じている学生にも「ここが居場所だ」と思ってもらえるような場所をつくるという『まがりプロジェクト』を行っています。

2019 年度までは、八王子駅前のフードバンク八王子ワークスの場所を『間借り（まがり）』して活動をしていましたが、今年度はコロナウイルスの影響により、感染防止と学生が全国各地に滞在している二点によって、オンラインで開催を試みている。各地域に散らばってしまった今だからこそ「つながる」ということの大切さを心に持ち活動している。2020 年度は、「かいこと」というお店の商品棟で物々交換をし、様々なお店の良さや駅前の情報を学生目線で発信することを計画しました。



## ■50周年記念事業 SDGs シリアルイベント SDGs Week の開催



創立 50 周年記念事業の一環として、国連の SDGs を推進することを目的に、2020 年 12 月 11 日～17 日にわたって、「価値創造×SDGs」Week（後援：国連広報センター）を開催しました。イベントは全てオンラインで実施し、国内外より多くの方が視聴されました。

### ●シンポジウム

#### 12 月 14 日：人道的競争の時代へ—平和構築のために我々ができること

赤十字国際委員会のレジス・サビオ駐日代表、オーストラリア・グリフィス大学の宗教・文化間対話センターのブライアン・アダムス元センター長、創価大学のニコラス・エマニエル国際平和学研究科准教授がスピーチし、平和社会の構築にむけて意見交換をしました。3氏は、「シンク・グローバリー、アクト・ローカーリー」（地球規模で考え、地域で行動する）の考え方を紹介し、世界で起こっている諸問題を正しく知ると同時に、自分がいる地域で解決への一歩を踏み出すことが重要であると述べました。



#### 12 月 15 日：人道的競争の時代へ——『人間の尊厳』が輝く未来の創造

国連開発計画（UNDP）の近藤哲生駐日代表は、生活の利便性や快適性の追求の反動として、気候変動に代表される地球的課題が拡大している点、コロナ禍により大きな影響を受けている人々がいることに触れ、UNDP が貧困の根絶・構造的変革・強靱な社会の構築の 3 つの開発分野において、多様な取り組みを行っていることを説明しました。

国際人権 NGO「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」日本代表の土井香苗氏は、世界の人びとの権利と尊厳を守るため、客観的かつ徹底した調査で得た事実に基づき、政策提言などを通して世論を動かしていく手法などを説明しました。また、人の殺害をためらう人間的な感情を持たない「キラードット」の使用禁止等に向けた活動状況を報告しました。

本学法学部の中山雅司教授は、「誰一人として取り残さない」との SDGs の理念に言及し、自分だけでなく他者のために貢献する行動こそが、「人権」の文化構築に繋がっていくと述べました。

### ●第 4 回ピース・フォーラム 2020

#### 12 月 12 日：レジリエントな世界のための創造的協働——パンデミック後世界における価値創造と新たな政策

創価大学、慶南大学（韓国）、中国文化大学による第 4 回ピース・フォーラム 2020 として開催し、各大学の教授らが参加しました。

基調講演では、同志社大学大学院教授の峯陽一氏がアジアとアフリカを地理的に括った「アフラシア」という概念を紹介しました。2100 年までに世界の人口は 100 億人を超え、アフリカとアジアの人々で 8 割以上を占めるとの予測をもとに、多様な人々が共生・共存する社会の在り方などについて述べました。その後、各大学の教授らが発表し、意見を交わしました。

## ●教育学部・教職大学院合同 ESD フォーラム

本学の教育学部と教職大学院による、ESD（持続可能な開発のための教育）フォーラムを開催しました。立命館大学国際教育推進機構の堀江未来教授（立命館小学校・中学校・高等学校 代表校長）が講演し、立命館小・中学・高校における国際理解や SDGs 教育の実践を紹介した後、コロナ禍における国際教育の展開等について語りました。続いて、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が掲げる理念に沿った教育を行う「ユネスコスクール」チャレンジ校の活動を、東京・創価高校など4校が報告しました。

また、本学の吉川成司教職大学院研究科長、関田一彦副学長（教育学部長）が挨拶しました。

## ●東アジア学校カリキュラムと教授法研究大会

第2回の教授法研究大会として開催されました。本学の鈴木将史副学長のあいさつの後、中国・首都師範大学初等教育研究所の部舒竹所長と、創価大学教職大学院の鈴木詞雄教授が、日本と中国の小学校における算数授業のカリキュラムや教授法などをテーマに講演しました。講演後、いくつかのテーマごとに分科会が行われました。

## ●学生企画「ユースセッション」

インドとケニアの交流校の学生と本学学生が、「ジェンダー」に関する問題を互いに発表し、ディスカッションしました。本学の山岡美穂（文学部4年）さんは、留学の経験などを振り返りながら、「一人一人が自分らしく生き、どうすれば公正な社会を実現できるのか」などを問題提起し、課題解決のための方向性について見解を述べました。また、交流校のグレースマチェルさん、エヴィタロドリゲスさんは、自国の抱える課題として難民キャンプの現状に触れ、女性のエンパワーメント（内発的な力の開花）を推進することの重要性を語りました。その後、発表の内容を踏まえ、ジェンダーに関する課題について積極的に意見が交わされました。



## ●クロージングイベント

本学卒業生で国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）駐フィリピン事務所の久保眞治代表のビデオメッセージが配信されました。久保代表は難民問題の解決は平和社会を構築するうえで重要なテーマであることに言及し、本学の建学の精神である「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を実践するため、「分断から協調に導く力をつけてもらいたい」と学生に期待を寄せました。続いて、国連機関等でのインターンシップを経験した本学の岡部 エミリー ナオミ（法学部4年）さん、馬場良美（文学部4年）さんが、そこで得た学びや経験などを報告しました。

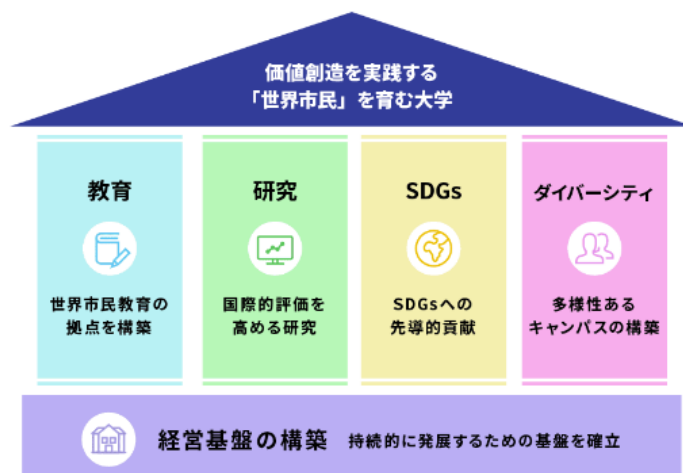
その後、立教大学の長有紀枝副総長（同大学院21世紀社会デザイン研究科教授）が基調講演をし、難民問題をはじめ多くの地球規模の課題に触れながら、「無関心の壁」を破ることが平和社会構築への第一歩になると述べました。最後に、赤十字国際委員会のジャン・ピクテ元副委員長が、世界の多くの人々が直面する課題に対して、傍観するのではなく他者の苦しみに寄り添い、「自分ごと」として想像できる一人一人になってもらいたいと語りかけました。



## <新たな中長期計画「Soka University Grand Design 2021-2030」>

創価大学は、2021年に創立50周年を迎えます。次なる50年の創立100周年を展望し、新たな10か年の中長期計画として、「Soka University Grand Design 2021-2030」の大綱を策定しました。

1971年の開学以来、創価大学は創立者池田大作先生が示された「建学の精神」の実現へ向け、不断の改革により発展を遂げてきました。2010年に発表した創価大学グランドデザインでは、「建学の精神に基づき『創造的人間』を育成する大学」を目標に掲げ、スーパーグローバル大学創成支援事業の採択に象徴されるキャンパスのグローバル化、中央教育棟建設をはじめとした教育環境の整備など、およそ10年間の取り組みにより幾多の人材を国内外の諸分野に輩出してきました。



2030年を目指した今回の取り組みにおいては、「世界市民教育」、「SDGsの達成」、「多様性あるキャンパスの構築」などをコンセプトとして、「価値創造を実践する『世界市民』を育む大学」とのテーマを掲げております。

### <指針>

- 平和・環境・開発・人権の分野を中心とした「世界市民教育」に関するプログラムの高度化をはじめ、持続可能な社会を構築するための能力を育む教育研究環境を整え、価値創造を実践する世界市民教育の拠点化を図ります。
- 全学をあげて「平和」の実現に貢献する研究を推進するとともに、大学・諸機関および研究者とのネットワークを形成し、SDGsの達成へ先導的役割を担います。
- 海外からの留学生や社会人など、多様な価値観や背景をもつ人々が共存し、共生するキャンパスを実現します。

### ■SDGsに関する取り組み

#### 【教育】

世界市民教育の体系化の一環で、SDGs指定科目から所定の単位を取得した場合には副専攻として認定します。

#### 【SDGs】

「全学SDGsプロジェクトの推進」、「SDGs達成に貢献する人材育成とネットワーク構築」の他、国連等の諸機関との連携、地域や社会との連携を推進します。

#### 【経営基盤】

サステナブルなキャンパスを目指し、カーボンニュートラルを目指したエネルギー計画などを推進します。